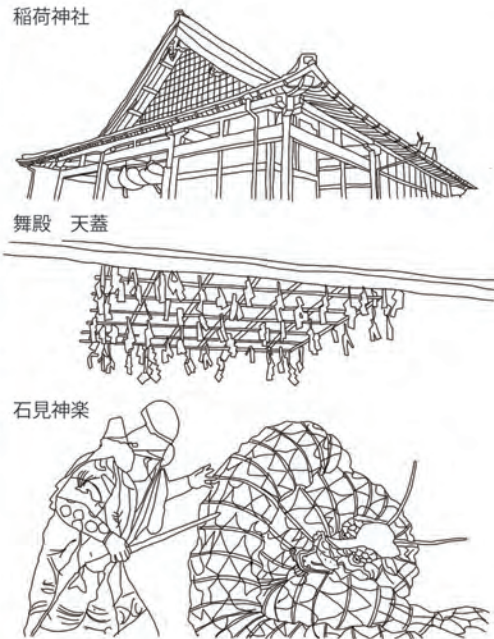


1. 敷地  
石見神楽の文化が根付いていた、島根県邑智郡美郷町粕淵を対象敷地とする。

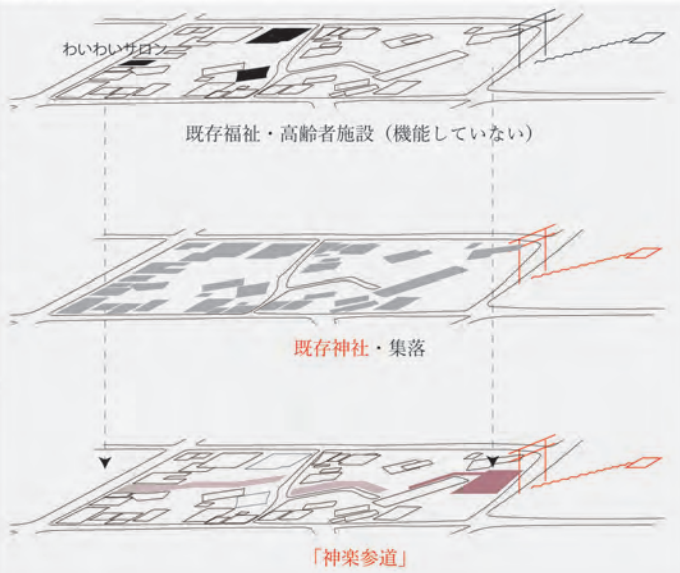


2. 背景・提案  
福祉拠点と神社をつなぐ「神楽参道」を設計し、まちの核とする。

①現状・課題

粕淵は高齢者率 45% を超えた限界集落の先進地であり、福祉に携わる人が極端に不足している。まち中の福祉施設や交流の場(わいわいサロン)は失われ、多くの高齢者は住宅で短時間の在宅介護サービスを受ける。

概念図



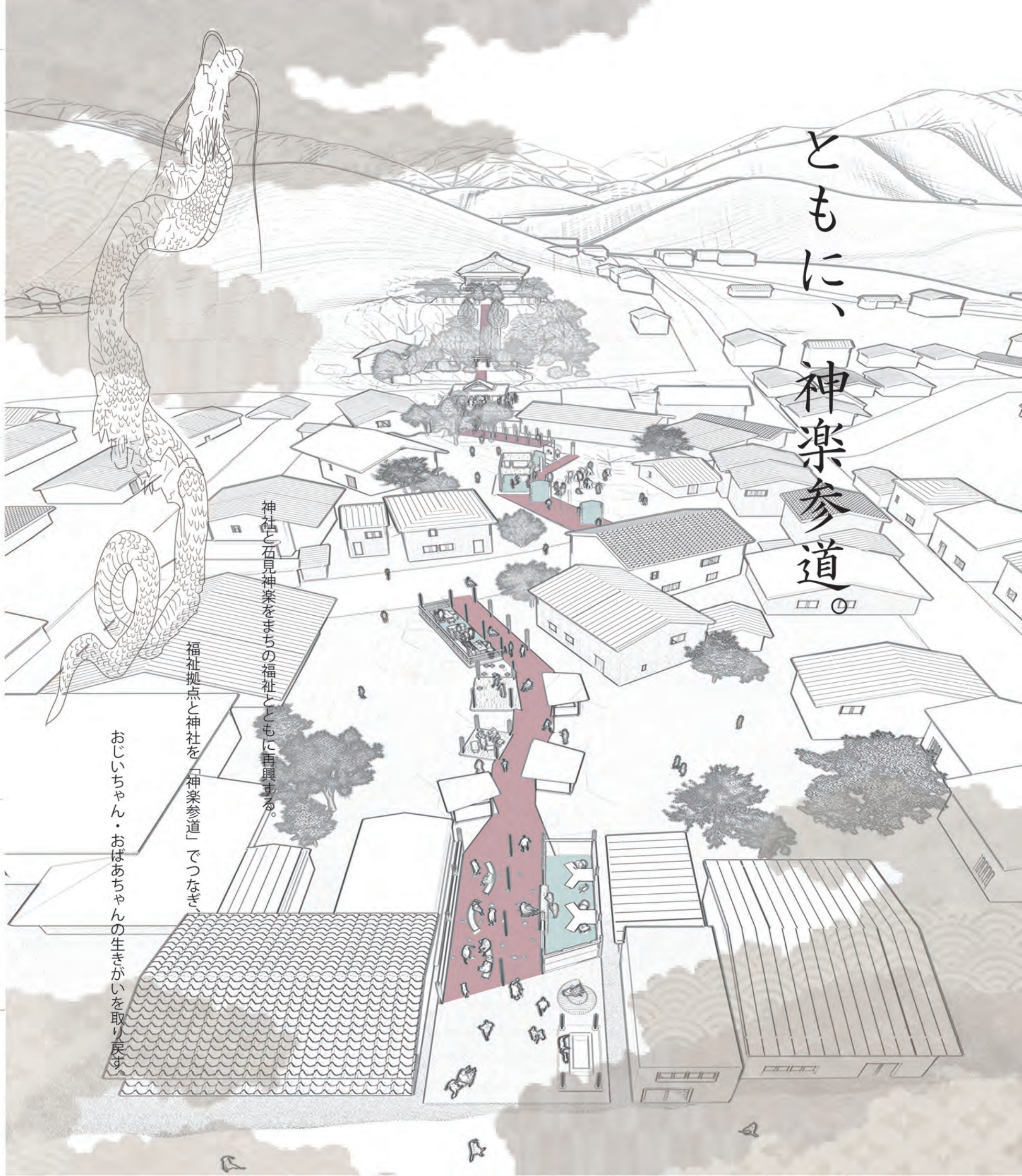
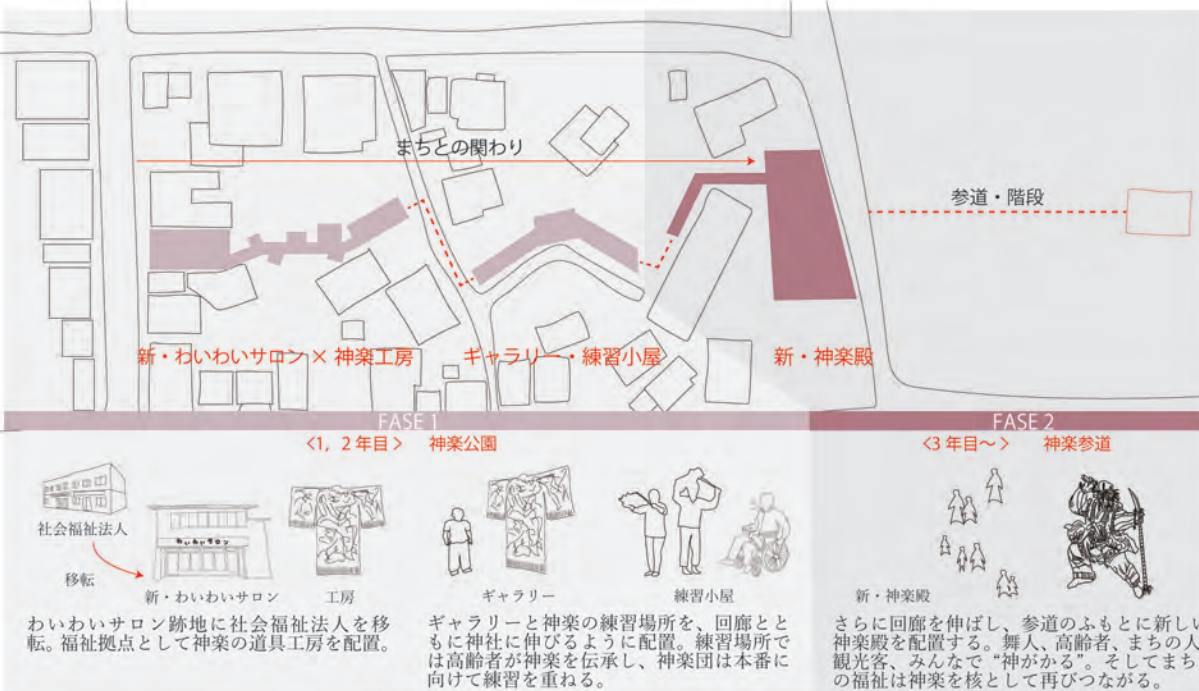
②まちの記憶

集落はかつて稲荷神社を中心として形成された。長い階段を参道とした神社で、まちの人たちの拠り所・石見神楽の練習場所だった。神楽の舞は伝統芸とともに世代を超えて伝承され、まちの人たちの生きがいになっていた。しかし高齢者にとって神社への道りは厳しくなり、神社と神楽は日常から姿を消していった。

③提案

福祉と神楽の2つを掛け合わせ、  
・高齢者がまちの中で活動できる居場所、  
・まちの人が積極的に福祉に関わる居場所を設計する。

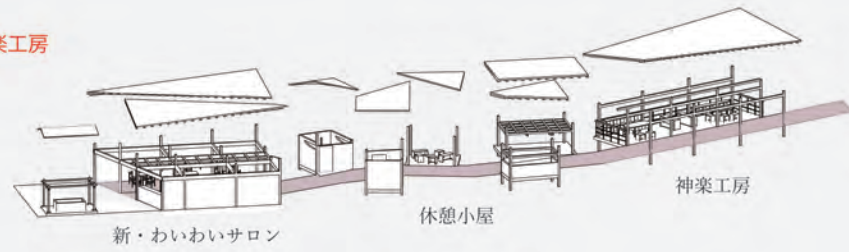
3. ステップ  
福祉とともに神楽を再興し、まちづくりへと波及させていく。まちの人が福祉と関わりを持ち始める。



FASE1

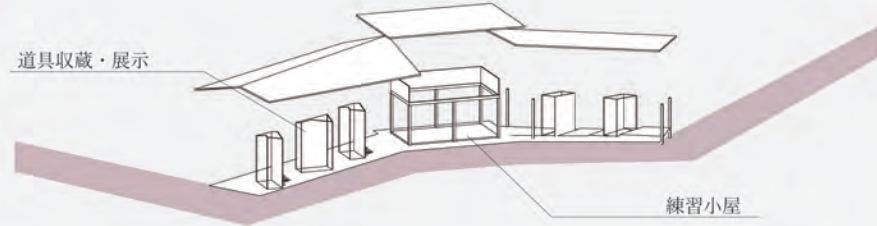
新・わいわいサロン × 神楽工房

わいわいサロンを改修し、福祉、“神楽参道”の入口として機能させる。まちの人と視線を合わせながら、高齢者が神楽の道具を制作する。



ギャラリー × 練習小屋

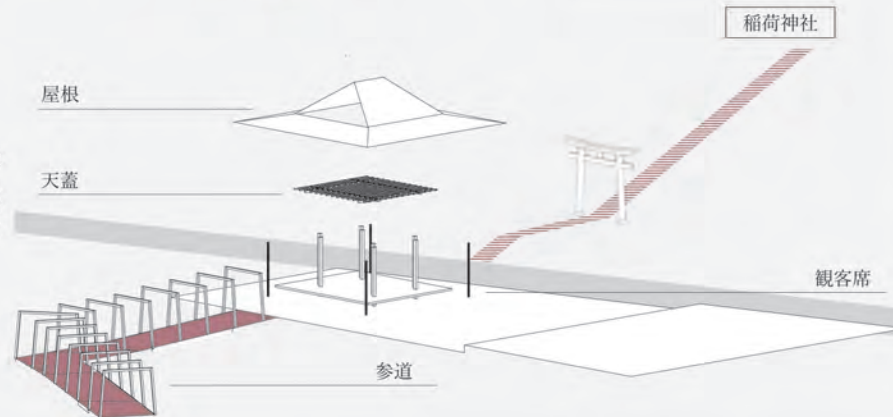
地形に沿って、屋根下のギャラリーと道を一体化させることで公園のような空間を作る。



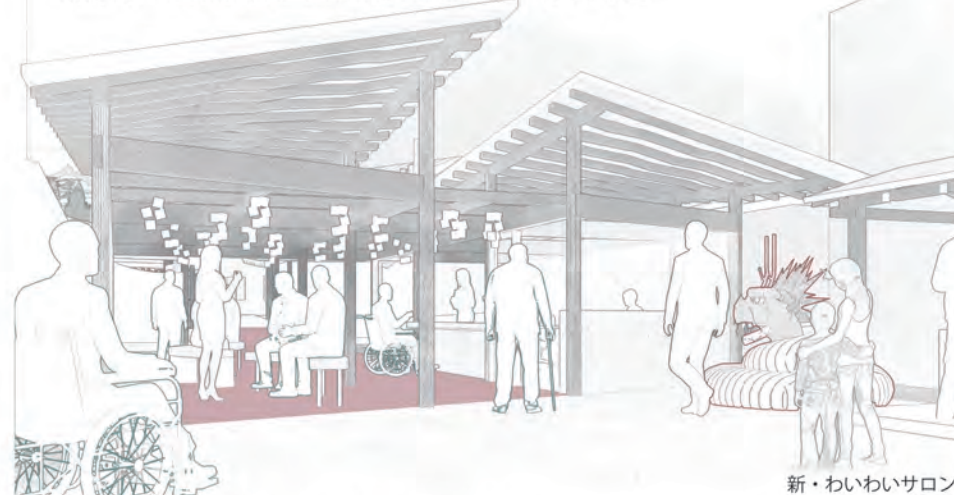
FASE2

新・神楽殿

稲荷神社拝殿の構成を再解釈し、舞人と高齢者、まちの人、観光客と一緒に「演目」を作り上げていける神楽殿とする。



“神楽参道”へと続く入り口。まちの人たちが福祉に触れるきっかけに。



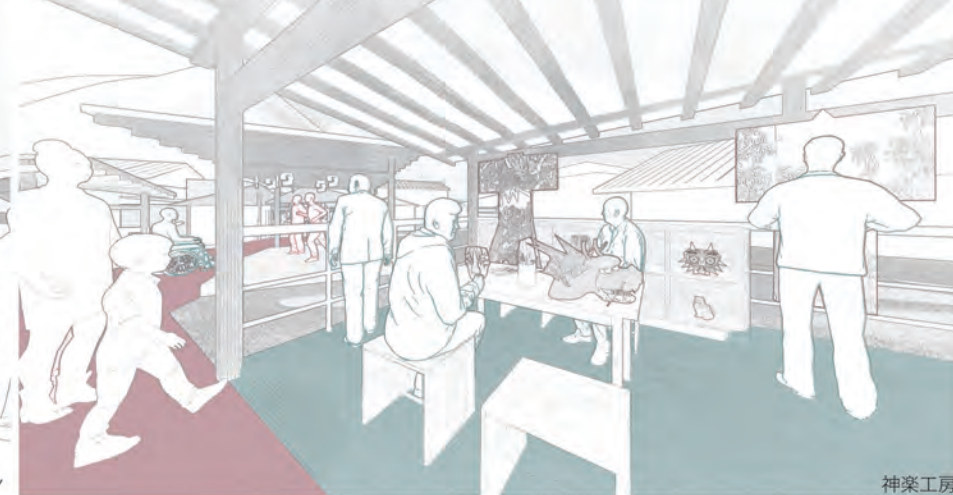
新・わいわいサロン

高齢者は神楽を伝承しながら、自分たちも踊り、体を動かす。神楽道具が展示される。



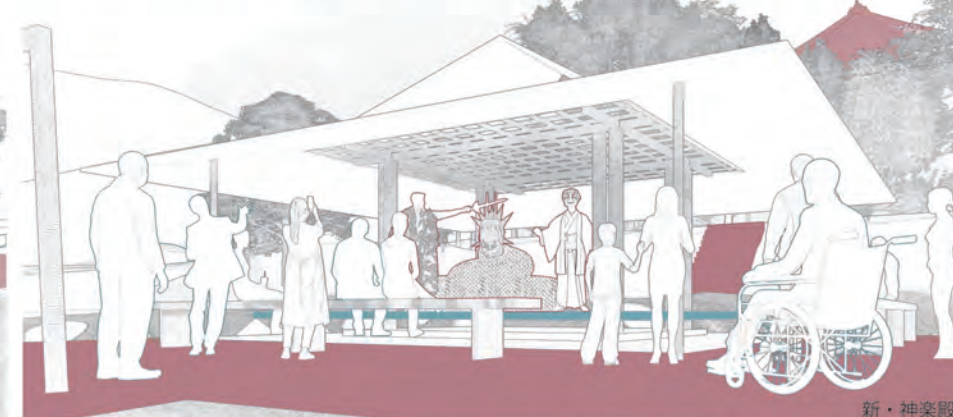
神楽ギャラリー・練習小屋

福祉サービスの一環としての神楽の道具作り。



神楽工房

神社へと向かう参道。周りの風景と記憶を重ねながら、新・神楽殿へスロープを登っていく。「神楽」を通して生きがいを感じる。まちは再びつながりはじめる。



新・神楽殿

